手記「私と白日会」　思い出すままに…　　草壁　隆

本文は小生の白日会との出会いから今日に至る歩みの概略を綴ったものです。

1955 年（昭和 30 年）当時、名古屋・栄の画材店「彩画堂」の２階で「絵画研究所」が開かれていた。その頃の画家、鬼頭鍋三郎、藪野正雄（敬称略）等が裸婦デッサンを教えていた。ここで講師をしていた白日会の岩月光金先生に出会った。

まだ白川公園に「アメリカ村」が存在していた時代で、米国人も油彩を描きに来ていた。そして私の油彩裸婦を見て「ナイス･カラー」と色をほめた。当時の自分を反映したやゝ暗い色調、イエローオーカー、セピア、サップグリーンを使って裸婦を描き「くさかべ色」などと云われていた。

あるとき K 絵具会社の社長がデッサン会場を訪れ「○や△を描いて絵画だ、といっている時代に、こうして真面目にデッサンしている若い人達を見て安心した」というコメントがあった。当時は抽象画全盛時代で写実的な作品は蔑視されていた。

私が岩月光金先生の指導で白日会展へ初出品したのは、裸婦デッサンを始めてから４年目だった。

初出品・初入選・会友推挙となった昭和 35 年当時、愛知県では岩月光金、森本真澄、六峰茂次、小原栄一郎、松本次郎がいた。三重県では森谷重夫、山本道乗、長井幸一、宮原鹿蔵、駒田治夫（私と同期）がいた。以後、今日までの歩みの端緒となった頃のことから思い出すままに綴ってみたい。

右より岩月光金、長井幸一、宮原鹿蔵、
中沢弘光先生、草壁隆、武藤健吾（退会）
昭和 35 ～ 6 年頃か、三重県熊野写生で
中沢先生の宿にて（撮影／山田英平 / 退会）

●グループ展のこと…

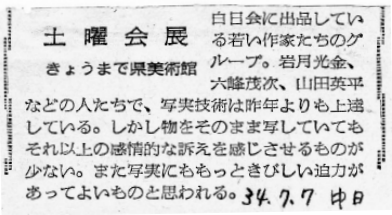
岩月先生門下が白日会展へ出品するようになり、自然にグループが出来て、昭和 33 年から旧愛知県美術館２階の通称「うなぎの寝床」と呼ばれた細長い会場で作品発表をした。当時は「土曜会」といった。白日会が名古屋巡回展を開く前年までグループ展は続けられた。

当時の美術館長・沢木駒三郎氏は私達の芳名録に「これでいいのだ！」と毎回サインしてくれた。その頃はこのような小さなグループでもギャラリー会場を貸してくれた。

その後、グループ展は広小路通りの「資生堂画廊」「めいせん画廊」などで小品展を、さらに名古屋駅前の毎日ビル２階の「ホルベイン画廊」へ会場を移し「もくど会」の名称で続けられた。未熟な写実作品に在野系作家から蔑視されていた感があった。

当時の名古屋の若い画家たちの多くは、この画廊を発表の場として育っていった。

その頃は東京での研究会もなく、描きたい・知りたいという気持ちは渇望状態だったので、伊藤清永先生が来名された折り



土曜会展
きょうまで県美術館
白日会に出品している若い作家たちのグループ。岩月光金、六峰茂次、山田英平などの人たちで、写実技術は昨年よりも上達している。しかし物をそのまま写していてもそれ以上の感情的な訴えを感じさせるものが少ない。また写実にももっときびしい迫力があってよいものと思われる。34.7.7 中日

白日会へ初出品する前年
（中部日本新聞）

に岩月先生に連れられて旅館でお会いし、話を聞き指導を受けたことなどが思い出される。

昭和 36 年ころから名古屋画廊に地元出品者が集い、伊藤清永先生が来名の折りに、スライド映像を用いた滞欧作品・写生などの話を熱心に聞いたり、また作品の指導を受けたりした時期もありしばらく続けられた。当時、伊藤先生の滞欧作「北欧の裸婦」を岩月先生が絶賛されていた。私にとっても一番印象に残る感動した作品だった。

岩月先生のアトリエで制作する
グループ（中央／草壁・S.38 年）

●私と白日会のこと…

昭和 38 年に会員に推挙され、その年に幸運にも第 6 回改組日展に初入選となった。同じ日展会場に棟方志功が出品していたことを後で知り感激した。その年の審査員長は鬼頭鍋三郎先生だったと聞いている。白日会からの入選者はまだ少なかった。

当時白日会事務所を担当されていた村上鉄太郎先生から入選激励のハガキをいただいたが、翌年から出品しなかったので上京したとき「期待していたのに何やっているんだ」としかられた。以後の自分は白日会に出品するだけで精一杯だった。

私の日展初入選を祝って 1963 年（昭和 38 年）旧愛知県美術館食堂にて、右から岩月先生・草壁・他は当時のグループ　　（撮影／山田英平氏）

そんな頃、白日会の巡回展を名古屋で開催する話が出て、伊藤・岩月両先生から、会場を確保してほしいと云われた。私と山田英平氏（44 年退会）が申し込みをしたところ、
「本年からグループ展には貸さないことになった、中央で公募した団体展の巡回展以外は出来ません」と云われた。

いくら説明しても、今までグループ展の申込者であった私達の申し込みを聞き入れてくれなかった。

美術館側は白日会を知らなかったのだ。

再三の申し込みで東京本展の目録を持参し説明した。「白日会史」が載っているので、これでやっと判ってもらえた。「このような歴史ある団体とは知らず失礼しました」の言葉に安堵した。受付が済んだ時点で岩月先生に「美術館の会場は確保できました」と報告し、伊藤先生にも伝えていただいた。

中日新聞社（当時は中部日本新聞社／旧社屋）への共催依頼は岩月先生に同行し美術記者の白木氏にもお会いした。

第 12 回もくど会展出品者
ホルベイン画廊にて（中央草壁）

●初めての巡回展のこと…

昭和 39 年、白日会第 40 周年記念展から名古屋巡回展が実現した。これが白日会初の地方巡回展となる。巡回作品は上層部作家と自発的参加者以外の作品は、私達名古屋の若手出品者が東京展懇親会（旧東京都美術館食堂）において一人一人に話しかけ出品依頼して集めたものがかなりあった。

当時は高度成長期に向かっている時代とはいえ、若い私達には上京するにも絵画活動にも苦しかった。

ホルベイン画廊にて
（中央／草壁・39 年）
後方奥に岩月先生が映っている

初めての巡回展という業務を、手弁当で当たっていた私達若手グループ数名が２回目を迎えたとき、

「これを毎年続けるのは、とても無理です」

というグループ連名の文書を岩月先生に宛てた。だが止めるわけにはいかない巡回展を始めたということで説得された。名古屋初の巡回展を１度で投げ出すわけにはいかないのだ。

それぞれ仕事を持ちながらの手さぐり状態だったが、どうにか続けられた。山田氏宅が自営業で電話が使えたので連絡事務所とし（一般家庭の電話はあまりなかった時代）、地元出品者への連絡コピー作成・発送、目録印刷などは全て私が担当した。（コピーはガリ版の次ぎに出来たヘクトロールというゴム状の樹脂版に原稿インクを写し、その上へ紙を置いて転写、という原始的なもの）。

会員から一般出品者まで二十数名だった。

第 45 回記念展会場入り口
中央／伊藤清永先生
（旧愛知県美術館２階）

巡回作品の返却費用は出品者個人に負担してもらった、なかには額が傷んだなどの苦情もあった。

41 回展で創立会員中沢弘光先生（S.39 年逝去）の遺作 15 点が特陳された。この展示で中沢作品の一部に小さな傷が付き、この件を私と進藤博氏が伊藤先生へ報告に行く。当時先生が入院中の病院で野田弘志氏と落ち合い三人で報告、遺族への対応は伊藤先生に託した。その日のうちに平松譲先生宅へも訪問し報告した、という一件もあった。

岩月光金先生葬儀の日にアトリエにて
昭和 43 年（中央、伊藤・平松両先生、
右端岩月夫人）

岩月光金先生が急逝されたのは、巡回展５年目（44 回展）を迎える目前の３月であった。地元の中心人物を失い、私達グループも途方にくれたが、44 回展開催中に急遽話し合いで代表者を決め、翌 45 回記念展より森本真澄氏（当時トヨタ自動車役付）を初代支部長とし、ここで中部支部が承認され発足した。この年、岩月光金遺作特陳室を設けた。

岩月先生没後も門下グループは市内で会場を借り、モデルを知人に頼みながらデッサン会を続けた。

この後昭和 51 年、三重支部（森谷重夫方）が発足した時期もあった。昭和 52 年には岩月光金先生没後 10 年のお墓参りを中部白日会有志にて行う。

岩月光金先生のお墓参り

名古屋巡回展の作品が「本部選抜」となった年の記録は不明だが、かなりの回数を経てからであった。毎年出品に参加協力していた作家が本部選抜で「選外」となり、苦情の電話を受けた。その返答・説明には苦慮した。

以後の私は、歴代支部長の裏方のような存在で業務を手伝ってきた。最初から携わって来たので頻繁に呼び出され便利屋のような存在だった。そして４代目支部長となり事務局兼任で 10 年間務めた。前任３名（森本真澄、西田耕作、六峰茂次）はトヨタ自動車出身。

巡回展が始まったころ「中部美術家協議会」という組織があり、東海地区の美術家による「選抜展」が名古屋タイムズ社主催で開催されていた。岩月先生の指示で私と山田氏が出品し協議会にも出席した。岡田徹、安藤幹衛、鈴木国稔等の画家が活躍していた。その後「中部総合美術展」と改名され、中部白日会からも毎年７名が選抜出品しタイムズ廃刊まで続けられた。

伊藤清永先生の壁画展示作業
（丸栄百貨店・右草壁）

●中部白日会展のこと…

巡回展 10 年目を節目に他の会派同様に「公募中部白日会展」を始め、第 1 回展で伊藤清永先生の賛助出品をいただいた。中日新聞記事は「おくればせながら白日会が中部展を始めた…」という書き出しであった。当時の内容は一部作家を除き現在と比較にならない低レベルなものであった。

伊藤清永先生の米寿を祝う会
1999 ／平成 11 年（新宿で）
（中部支部から私 1 人で出席）

10 回展を過ぎたころから、他会派から移籍した出品者や愛知芸大、名古屋芸大など美校出身者などが加わるようになって、二流視されてきた支部展も少しづつ充実されてきた。

その間、美術界の傾向は抽象から写実へと移り、絵画ブームという時代背景もあって、東京展における有名人気実力作家の台頭にともない白日会の知名度もあがり、中部支部展への出品者、応募者も質量ともに充実されてきた。

そして本年（平成 26 年）90 周年記念展・中部白日会 40 周年記念展を開催した現在、中堅・若手プロ作家、そして多くの日展作家を擁し、一般応募者を含め構成員約 120 名の支部団体に成長し、中部地区美術文化の一翼を担うに至る。

名古屋展レセプションで伊藤清永先生と

思えば若かったグループも発足当時の出品者も、退会・死亡などで今では殆どいなくなった。支部長を 10 年務め次の代へ継いだ今、周囲を見れば自分が一番の年長者となってしまい、その間に 50 余年という歳月が過ぎた。

岩月光金先生はトヨタ自動車の洋画部を指導していた経緯もあって、先生没後の中部支部長３名は「トヨタ」出身であり、続く私が岩月の弟子であったことから、私が次の代へ継いだことで岩月関連の人材は途絶え、私の中では時代が変わってしまったという感慨がある。

支部長交代後は保持している古い記録や資料をひもとき「名古屋巡回展 50 年のあゆみ」及び「中部白日会展 40 年の歩み」を編纂した。

改組第 1 回東海日展前夜祭

●日展出品のこと…

私が日展へ再出品を始めたのは、伊藤清永先生がお元気なうちに指導を受けて再挑戦すべきと思い（62 才で今さらという思いもあったが…）、おそるおそる研究会へ出席したのが平成 10 年

だった。講評では大きな修正もなく第30回日展に何とか入選出来た。このとき白日会からの審査員は平松譲・斉藤秀夫両先生で、審査員は２名だった（現在は４名）。伊藤先生が心配してくださり入落を問い合わせていただいたと後で聞いた。

この年の入選者懇親会（上野）で私が自己紹介のとき、途中で伊藤先生がマイクを持ち発言され、満座の中で名古屋巡回展が始まった若き頃の私の話をしていただいた。名古屋からの出席者はまだ私だけだった（曾剣雄氏がいたが欠席だった）。この後名古屋からの応募者、入選者も増えてきた。

27才の初入選以後は日展へ応募する余裕もなく、35年の空白ができてしまったが、ここまでコツコツと白日会への出品を積み重ねてきた「継続」が日展へつながっていると思う。以後は毎年入選しH.18年には「会友」に承認された。

清永先生が亡くなったのは自分が中部支部長のときだった（H.13年）、密葬に出席し、つづく白日会葬では美術関係受付係りを務めた。日展上層部の参列者の顔と名前がつながった。

東海日展では「来名理事案内係り」を仰せつかり、新幹線へのお出迎え・ホテル・美術館への案内など光風会の係りと２名で数年間努めた。そして17年連続入選のいま、78才（H.26年現在）という年齢で日展出品に疲れを感じているし、空白期間の長さを埋めるには残る期間があまりにも少ない。

80歳を機に日展への区切りを、という気持ちがよぎる。

おわりに

名古屋における白日会展のスタート時点から携わってきた者として、記憶をたどりながら当時の状況を残そうと、不備なものですが私の手記として拙文を綴りました。これが若い人達の目にふれたら幸いです。

白日会に初入選以来50余年の歳月を経ました。自分の人生は岩月先生との出会いに始まり、事務局も歴代３名に協力し４代目を努め、弱小団体だった頃の白日会とともに歩んできたという感慨があります。苦しい生活状況のなかで絵画活動を続けられたのも、よき先生方、先輩・同輩方の出会いがあったからこそと思っています。

最後に今は忘れられた存在の岩月光金先生を改めて紹介しておきます（次頁）。
経歴は刈谷市美術館における遺作展（1984年）に紹介されていた資料に私が加筆したものです。

（遺作展では作品の傷んだものもあり、私が弟子であったので色を知っているからと親族より修復の依頼があったが、経験・自信なく辞退した）。

2014年（平成26年）11月　　草壁　隆

岩月光金先生
(旧愛知県美術館で・1966)

岩月光金（1917 ～ 1968）

大 正 6 年／豊田市竹町生まれ。
昭和 18 年／第 20 回白日会展で白日賞受賞、
会友推挙となり中沢弘光に師事。
昭和 19 年／会員推挙、当時知立に疎開中の和田英作を師に紹介され 指導を受ける。
昭和 21 年／第 1 回日展に入選。
昭和 23 年／小学校教師を退職し画業に専念する。
昭和 34 年 8 月／名古屋栄の丸栄百貨店美術画廊において、釈尊 2500 年祝典記念事業として「中部日本国際仏教センター設立資金カンパ」の作品展を開催し 3 ～ 80 号を 40 点出品。
昭和 39 年／白日会で初の名古屋巡回展開催に尽力、東南アジア・インド旅行。
昭和 40 年／中国旅行。
昭和 43 年 3 月／肝硬変のため逝去、享年 51 才。
昭和 59 年／刈谷市美術館にて遺作展が開催される。

岩月光金作品

「父の像」F50/ 昭和 23 年

「二　人」F100/ 昭和 26 年

「画　室」F60/ 第 5 回日展

「胡同（ホートン）の子供達」
F60 ／第 10 回日展

東海日展が開催されたときには病床にあり、この作品が中日新聞に掲載され、先生の枕もとにはその新聞が置かれていた。亡くなられたのはその 1 ヶ月後であった。

（掲載作品・筆者選択）